

「気候変動監視レポート2019」を公表しました

2019年の日本と世界における異常気象及び気候・海洋・大気環境についての解析結果を、「気候変動監視レポート2019」として公表しました。

「気候変動監視レポート」は、社会・経済活動に影響を及ぼす気候変動に関して、我が国と世界の気候・海洋・大気環境の観測及び監視結果に基づいた最新の科学的な情報・知見をまとめた年次報告で、1996年より刊行しています。

今般、2019年の状況を取りまとめた「気候変動監視レポート2019」を公表しました。本レポートは、トピックスと3つの章で構成され、各章テーマの最新情報を掲載しております。主な掲載内容は別紙をご覧ください。

また、本レポートの全文は以下のURLからご覧いただけます。

掲載URL：<https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/monitor/index.html>

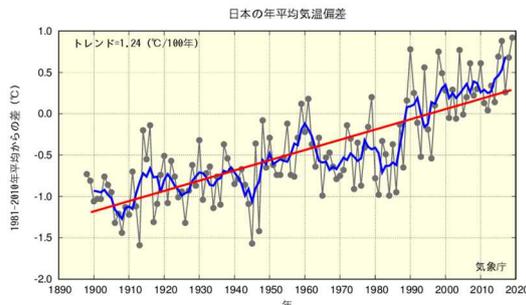
問合せ先：地球環境・海洋部 地球環境業務課 担当 原田・國光
電話 03-3212-8341（内線 4225, 5168）

気候変動監視レポート 2019 の主な内容

<トピックス>

I : 2019 年の日本の年平均気温が統計開始以降第 1 位

- ・ 2019 年の日本の年平均気温偏差（1981～2010 年の 30 年平均値からの偏差）は +0.92℃で、統計を開始した 1898 年以降で最も高い値となりました。



図：日本の年平均気温偏差の経年変化
(1898～2019 年)

その要因としては、二酸化炭素などの温室効果ガスの増加に伴う地球温暖化の影響に加え、エルニーニョ現象やインド洋熱帯域の海面水温の上昇など複数の自然変動が考えられます。

II : 海洋気象観測船が捉えた海洋の深層循環

- ・ 2018～2019 年の海洋気象観測船の観測において、北太平洋の海底付近で自然界に存在しない人為的な化学物質であるフロン類が検出されました。
- ・ フロン類の検出された海水をたどることで、南極周辺で沈み込んだ海水が海底地形に沿って底層を北上し北太平洋にいたる海洋大循環を裏付けることができました。

III : 2019 年の南極オゾンホールが最大面積が 1990 年以降最小

- ・ 2019 年のオゾンホールは、大規模なオゾンホールが継続して見られるようになった 1990 年以降で最大面積が最も小さく、消滅が最も早くなりました。
- ・ オゾンホールの拡大が抑制された要因として、8 月末に南極域上空において成層圏突然昇温が発生したことなどが考えられます。

<第 1 章 2019 年の気候>

世界各地で発生した異常気象や、日本の季節別の天候の特徴、それらの現象の要因となった大気と海洋の状態についてまとめています。2019 年は、令和元年房総半島台風や令和元年東日本台風の接近・通過の際は東日本や北日本を中心に暴風・大雨となりました。

<第 2 章 気候変動>

気温や降水量、海面水温、海水面積等の長期的な変動についてまとめています。日本の年平均気温は 100 年あたり 1.24 度の割合で上昇しています。降水量について長期的な変化傾向はみられないものの、大雨や短時間強雨の発生頻度は増加しています。

<第 3 章 地球環境の変動>

大気と海洋の温室効果ガスやオゾン層、日本における黄砂や日射量の変動についてまとめています。二酸化炭素濃度は大気・海洋ともに長期的に増加しています。